22　次の文を読んで、後の問に答えよ。　　　　〈京都大〉二〇二一年度出題

　ひとりの少女が直撃弾にうたれて路上に死んだ。さういふ死体は、いや、はなしのたねは、いくさのあひだ、空襲のサイレンがに鳴りわたつたあとには、おそらく至るところにころがつてゐたのだから、その場所が山の手の某アパートのまへであらうと、他のどこであらう後日の語りぐさになるやうなことではない。しかし、わたしはこの小さい事件をおぼえてゐる。といふのは、当時わたしはそこのアパートの一室にひとりでくらしてゐて、少女もまたおなじ屋根の下の、となりの室に、これもひとりで住んでゐたからである。そして、少女の倒れたところは、わたしの室の窓からすだれ越しに見えるの上であつた。

　さういつても、わたしはかねて少女と口をきくどころか、顔すらろくに見たことがなかつた。関係といへば、ただ壁をへだてて声を聞いただけであつた。毎朝、わたしはサイレンのえる声に依つてたたきおこされないときには、少女の歌ふ声に依つてうとうと目をさますといふたのしい習慣をあたへられた。歌はシャンソンであつた。そして、その歌の音色が青春を告げてゐた。それはいつ炎に燃えるとも知れぬ古い軒さきに、たまたまわたしの束の間の安息のために、カナリヤの籠が一つさげられたといふに似てゐた。しかあはれなカナリヤもまた雷にうたれた。その日わたしはアパートを留守にしてゐたので、かへつて来て窓の外を見たときには、少女の死体はすでにどこやらにはこばれて、道は晩春の月の光に濡れてゐた。昭和二十年四月某日の夜のことである。

　となりの室の歌声が絶えたあとに、アパートでは当分少女のうはさが尾をいた。ひとが室内をしらべてみると、二万円の現金とおびただしいタバコの量とが発見されたといふ。そして、ときどき少女をたづねて来た中年の紳士がその後ぷつつりすがたをあらはさないといふ。うはさにはさまざまの解釈が附せられた。しかし、わたしにとつては、解釈はもとより、うはさも不要であつた。ただ朝の軒さきにカナリヤのうしなはれたことが不吉の前兆のやうにちよつと気になつたが、それもぢきにわすれた。おもへわたしは当時すべての見るもの聞くものとすだれ越しの交渉しかもたないやうであつた。実際に、わたしの室の窓には一枚の朽ちたすだれがぶらさがつてゐて、それがやぶれながらに、四季を通じて、晴曇にも風雨にも、ともかく時間に堪へつづけてゐた。

　越えて五月、その二十五日の夕方、Ａといふ友だちが塩豚をみやげにもつてたづねて来た。ちやうど、わたしのところにちとの酒とちとの野菜とがあつた。たちまち、饗宴がひらかれた。当日は晴天であり、巷のけしきは平穏に見えた。そして、塩豚のスープは極上であつた。われわれは上機嫌で、いづれ焼けるかも知れないがなんぞと、まだ焼けてゐない現在をはかなくもんで、すだれからすかして見た外の世界の悪口をいつて笑つた。やがて酒が尽きると、笑もにがく、巷もすでに暗く、家の遠いＡはいそいでかへつて行き、わたしはごろりと寝た。サイレンの音にねむりがやぶれたのは、それから三時間ほどのちであつた。おきて出ると、まぢかの空があかあかと燃えあがつて、火の子が頭上にふりかかつた。猛火は前後から迫つて、すなはち窓のすだれを焼いた。すだれのみならず、室内のすべて、アパートのすべて、いや、京の町のすべてが一夜に焼けおちた。わたしはどうやら路上の死体になることはまぬがれたが、そのときわたしのポケットには百円ぐらゐの現金と五本ぐらゐのタバコしか残つてゐなかつた。

　その後、わたしはわたしの室の焼跡をただの一度も見に行つたことはない。しかるに、猛火の夜のあくる日、これは災厄に遭はずじまひのＡがわざわざわたしのゐない焼跡を見舞つてくれたさうである。後日に、そのＡのはなしに依ると、もとわたしの室のあつたところに、そこのいぶりくさい地べたの上に、焦げた紙きれが一枚落ちてゐたので、拾ひとつて見ると、それは古今集の一ひらであつたといふ。わたしのもつてゐた古本の山がぞつくり灰になったあとに、どうすれば古今集の一ひらだけが焼けのこつたのか。合理主義繁昌の常識からいへこれははなしができすぎてゐて、ウソのやうにしかおもはれないだらう。しかし、決して非常識ではないＡがかういふことでウソをつくとは絶対におもはれない。人生の真実のために、このはなしはウソではないと信じておかなくてはならぬ。

　そのときから十年をへた今日に至るまで、わたしは窓にすだれがぶらさがつてゐるやうな室に二度と住んだことがない。またその当時にしても、毎日すだれを意識しながらくらしてゐたわけでもない。それに気がついたのは、いくさがをはつてから年を越したつぎの春であつた。

　ある日わたしは旅に出て、あたりにを見わたす座敷でどぶろくをのんでゐた。すつぱいどぶろくであつた。座敷は障子をあけはなしてあつたが、片側が窓で、そこにすだれがさがつてゐた。けた古すだれで、いくさのあひだから長らくそこにさうなつてゐたのが、たれの気にもとめられずに、ついうち捨てられたままのふぜいと見えた。あついといふ日ざしでもないのに、すだれは風をさへぎつて、うつたうしくおもはれた。窓のそばに寄つて巻きあげようとすると、古すだれはあはや切れて落ちさうで、黒ずむまでにつもつた塵は手をふれることを禁じてゐた。それはあたかもわたしの室の焼けたすだれがここにそつくり移されて来たやうであつた。そのとき、すだれの向うに、花の色のただよふのが目にしみた。藤であつた。窓の外に藤棚があり、花はさかりであつた。

　庭に出て、そこにまはつて行くと、座敷は中二階のやうなつくりになつてゐたので、窓の下と見えた藤棚はおもつたよりも高く、手をのばすと、指さきは垂れさがった花の房をめようとして、それまでにはとどかなかつた。わたしは悪癖のへたな狂歌をつくつた。

　　むらさきのつれなくふりあげて引手にのらぬ棚の藤浪

わたしが花を垣間見るのはいつもすだれ越しであり、そしていつもそこには手がとどかないやうなせになつてゐるらしい。

（石川淳「すだれ越し」より）

注（＊）

東京の町のすべてが……＝昭和二十年（一九四五）五月二十五日、東京の中心部がアメリカ軍爆撃機による大規模な空襲を受けたこと。「山の手大空襲」と呼ばれる。

問１　傍線部（１）のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問２　傍線部（２）はどういうことか、説明せよ。

問３　傍線部（３）はどういうことか、説明せよ。

問４　傍線部（４）のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

◎問５　傍線部（５）はどういうことか、前年（昭和二十年）の「すだれ越しの交渉」を踏まえて説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａたびたび空襲がある当時の状況では、Ｂ直撃弾で死者が出ることは日常茶飯事であり、Ｃ人々の耳目を集めることではなかったから。

文末が理由説明でなければ減点２。

Ａ＝３〔戦時下で空襲が頻繁にあったという説明があれば可。〕

Ｂ＝４〔空襲の直撃弾で人が死ぬことが東京のあちこちであった、という説明があれば可。〕

Ｃ＝３〔人々に注目される事件ではない、という内容があれば可。〕

問２　Ａ壁越しに聞こえる隣室の少女によるシャンソンの歌声は、Ｂ青春の儚い思慕や束の間の安息を私にもたらしてくれたが、Ｃ他の戦争被害者同様 Ｄその少女もまた突然の空襲で犠牲となったということ。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔少女がシャンソンを歌っていた、という内容があれば可。〕

Ｂ＝３〔「青春を告げる」に関わる内容がなければ減点２。〕

Ｃ＝２〔「もまた」に該当する説明であれば可。〕

Ｄ＝３〔「カナリヤ」が少女を、「雷」が空襲を意味していることを明示していなければ、不可。〕

問３　Ａ後から考えると、Ｂ戦争末期になり東京の町が空襲の被害に遭い、死が日常になってきた時に、Ｃ私は精神の均衡を保つために、Ｄ隣室の少女の死さえも忘れるほど、Ｅ眼前の事実や見聞を直視することなく距離を取り、現実感を失っていたということ。

Ｅがなければ全体０。

Ａ＝１〔後から当時を振り返っている、という内容があれば可。〕

Ｂ＝２〔当時は戦争中で死が身近だったことが説明されていれば可。〕

Ｃ＝３〔精神状態を安定させるため、という内容があれば可。〕

Ｄ＝２〔隣室の少女の死をも忘れるほど、という内容があれば可。〕

Ｅ＝２〔世間の出来事と距離を保つ、という内容があれば可。〕

問４　Ａ大空襲の猛火で焼け落ちた部屋の跡に古今集の一片だけが残っていたという話は、Ｂ世界が戦争で滅んでも文学だけは永遠に残るというＣ希望に思えるが、Ｄ合理的に考えれば Ｅ単なる偶然に過ぎず、事実として信じがたいから。

Ｅがなければ全体０。文末が理由説明でなければ減点２。

Ａ＝２〔古今集の一ひらが焼け残った、という要素があれば可。〕

Ｂ＝２〔文学は不滅だという内容の説明があれば可。〕

Ｃ＝２〔希望といった肯定的評価があれば可。〕

Ｄ＝２〔合理的に考える、という内容があれば可。〕

Ｅ＝２〔偶然すぎる出来事で、信じがたい、という内容があれば可。〕

問５　Ａ隣室の少女とは壁越しにその歌声を聞く関係で、その死さえも直接見ることができなかったように、Ｂ戦時下の死と隣り合わせの生活の中で自らの精神を保つために、現実と距離を取り、直接関わらないような生き方をしていたせいで、Ｃ美しいものに対しても距離を取るという運命になったことをＤ悲しんでいること。

Ａ・Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔隣室の少女との「すだれ越し」の関係を説明できていれば可。〕

Ｂ＝２〔現実と距離を置く生活をしていた、と指摘できていれば可。〕

Ｃ＝３〔藤のような美しい存在に直接触れられない運命、という説　明があれば可。〕

Ｄ＝３〔現実の美に触れ得ないことへの後悔や悲哀に言及していることは必須。〕